

レポート4「竹筒～百夜月～九重」

■竹筒（たけとう）

湯ノ口から川を下る事約 3.5 km、竹筒の集落が見えてくる。そこは奈良県十津川村である。

昔、道路がなく川が交通の中心だった時代の話だが、生活雑貨や食料品等色々な品を売っているお店が一軒だけあり、お正月やお盆には川の上流や下流から多くの人達が買い物に訪れたという。今現在、新宮市や北山村に向かう道路整備も終わり、大変便利になった。しかし昔 60 軒以上あった家も 20 軒程に減ってしまい、時代の流れでお店もなくなってしまった。との事だ。

大変便利になったとは言うものの、この竹筒という地区は役場がとても遠い。十津川村は日本一の面積を持つ村で、竹筒はぴよこつと飛び出た部分にある。

集落の人に聞いたところ「いくら道路が良くなっても役場に行くには1時間以上かかるね～」と言っていた。ぴよこつと飛び出た部分にあるので、どこに行くにも必ず他県を通らないといけないのだ。十津川村役場に行くのにも、和歌山県を通りぐる～つと大回りしなければ行けない。直線距離で役場まで 14 kmだが、道路を通ると 45 kmになるといった具合だ。もし他県を通らずに行こうとすると集落の裏山を奥深く入り込み、多分たどり着く前に遭難するであろう。

昔は熊も多かったようで、竹筒の猟師さん曰く「熊はイノシシと違って、身

体が柔らかいし頭もいい。身体をひねったり、ねじったりする事ができる。それにスバシッコイ。だからイノシシみたいにかかサ音をたてないで近づいてくるから、気イ付けなあかん」

今年の7月だったと思うが、新宮市熊野川町内や、この竹筒地区で熊に蜜樽（ごーら）を沢山壊されハチミツを食べられた。と猟師さんから連絡をもらった事があった。

竹筒地区も他の集落と変わらず、筏や団平船などを生業としていた人達は多かったようである。他にも炭焼き、養蚕などをしていたらしい。

北山村から新宮市の河口へ下って行く中で、この竹筒だけ他の地区と大きく違うところがある。通常は川の真ん中辺りを県境にしている為、対岸は他の県になるはずである。しかしこの竹筒だけは対岸も奈良県なのである。どういう事が理解して頂けるだろうか？地図がないと理解しづらいかも知れない。何故なのか私もわからないが、集落の人は「竹筒の人は対岸にも土地を持っていたから」というのである。この件に関してはもう少し調査が必要だ。

竹筒を通る事があれば是非見て頂きたいモノと言え、北山川の蛇行である。新しく整備された道路から、旧道を少し進んだ所に三県境の看板も立っている。川が大きく蛇行し、対岸に山が見える。その丁度真ん中辺りから上流が奈良県、下流が三重県である。旧道は車も少ないので、ゆっくり眺めるには最高の景色だ。



竹筒から臨む北山川の蛇行

■百夜月（ももよづき）

竹筒から 500m 程下流の三重県側に百夜月（ももよづき）という集落がある。集落といっても現在、民家は一軒しかない。正式には三重県熊野市紀和町花井（けい）である。

百夜月・・・どこことなくおとぎ話にでも出てきそうな地名である。何故こう呼ばれるようになったのか。次のような昔話が残っている

竹筒の少し南の北山川の対岸に、百夜月（三重県紀和町）という村がある。そこに、光月山紅梅寺（こうげつさんこうばいじ）という古い寺があった。寺の庭には紅梅があり、春にはたいへん美しい花を咲かせ、よい香をあたりに漂わせていた。

寺には、一人の美しい尼さんが住んでいた。毎日、仏の教えを広めるために

行をしたり、読書するなどして静かに暮らしていた。また、寺の周りを開いて、野菜も作っていた。

この尼さんは、近くの村の若者たちのあこがれの的であった。しかし、真剣に仏の教えを広めたり、読書にうち込んでいる尼さんは、若者たちのことなど考えてみたこともなかった。

さて、対岸の村に一人の若者がいた。彼は寺の畑でたち働く尼さんの姿を見てから、心の中は尼さんのことでいっぱいになってしまった。ぜひ会って話したいものだと思った。そして、月のない闇夜になる日を待った。

「よし、今夜こそ川を渡り、尼さんに会って来よう。」と決心した。やがて、夜になった。川の音さえもシーンとして流れているようであった。川底をつき刺す棹（さお）の音だけが闇の中に響いた。川の中ほどまで来たときである。対岸の山から突然、大きな月がヌツと顔を出して、あたりが急に明るくなってしまった。

「これは困った。こんなに明るくなつては、誰かに見つかってしまう。人に知れたら、尼さんにたいへん悪いことをしたことになる。」と考え直した若者は、急いで舟をひき返し、とぼとぼと家に帰った。

次の夜も、その次の夜も、また次の夜も若者は北山川を渡ろうとした。しかし、川の中ほどまで来たとき、月の光がまぶしくて、どうしても渡ることができなかった。

「今夜で何度めだろうか。」

若者は、一、二、三と指をくっしてみた。すると、すでに九十九日目であった。

若者は、このことを母親に打ち明けてみた。

母は、「ああ、なんともったいないことを…。よりによって尼さんを好きになるとは……。あの方は、仏の教えをお守りし、広めている方だから、お前なんか、とてもとても……。そんな気持ちを持つことも恥ずかしいことだよ。」

「あのお月様は、悪いことを人間がしないように、いつも地上を照らしているのだよ。だから、お前が百夜通っても、川を渡ることは、できないのだよ。」と、諭（さと）した。

若者は、とても悲しんだ。「お月様もあの尼さんを、お守りしているのか。」

それから、尼さんの住んでいる村を百夜月と呼ぶようになった。

ところで、尼さんは、もっと仏の教えを広めたいと考えた。そこで、寺に伝わる宝物を近くの村々へ分けて祀（まつ）ってもらうことにした。そうすれば、信仰も広まると考えてのことだった。

まず、花びんを下流の村に分けた。村人達は、紅梅寺の宝物をいただいた、ということで、お堂を建ててお祀りした。そして、このむらを花井（けい）とよぶようになった。

川を渡った村には、九重（ここのえ）の重箱を分けた。この村は、これにちなんで九重（くじゅう）という名をつけた。

上流のむらには、美しく磨かれた竹の筒が分けられた。ここは竹筒（たけとう）とよばれるようになった。

百夜月を守り続けた最後の住人が 5 年前に亡くなり、今は住む人もなく、静まりかえっている。しかし「百夜月が忘れられてしまうのが悲しい」と言っていたお父さんの気持を受け、息子・H さんが時々百夜月に来ているのだ。家を守る事は、百夜月を守る事なのかもしれない。

是非訪問して欲しいと言いたいところだが、簡単に行ける場所ではない。三重県の山から行くにも道がない。川を渡るにも橋がない。残るは川を渡るか、空を飛ぶかだ。どう考えてもヘリコプターをチャーターするより、渡し舟の方が安くあがる。しかしいまだき渡し舟などない。

私はとにかく運が良い。なんと H さんが行く時に、ご一緒させて頂く事が出来たのだ。川原はいつも歩き慣れているが、初めて降り立った百夜月の川原はワクワクして何処となく違った感じがした。

光月山紅梅寺（こうげつさんこうばいじ）であろうか？お寺があった場所まで案内して頂いた。小さなお堂が建っていた。小さな仏像もある。建物やお墓の跡なども残っている。昔はお寺の近くに 10 数軒の民家があったという事だ。



対岸から臨む百夜月



お堂

昭和50年代頃は、Hさんのお父さんが植えた菖蒲（しょうぶ）や蓮（はす）の花が咲き乱れ、多くの観光客が訪れたという。

やはり百夜月でも筏は組んでいたようである。Hさん曰く「対岸の山（和歌山県や奈良県）から木を下ろし、百夜月側で組んでいた」との事だ。他にも色々お話を伺ったが一番印象深かったのが百夜月という地名の由来である。先ほど紹介した話とは違うのだ・・・しかし昔話の良さがある。この話は今は内緒にしておこうと思う。いつか百夜月ツアーをおこなう事があれば、その時にお話したいと思う。

色々な話を伺っていると、時が経つを忘れてしまう。気が付けば周りは真っ暗だ。もちろん百夜月と言えども電気はきている。しかしHさんが気をきかせてくれて、明かりを消してくれた。凄い！真っ暗だ。今これだけ真っ暗な世界を体験できる地区は他にはないのではないだろうか・・・。

百夜月には街灯はない。上流の竹筒や下流の九重も見えない。見えるのは空に輝く星だけである・・・と言いたかったのだが、昨年9月に九重トンネルができ、その光が百夜月を照らしていた。少し残念。名残惜しいが夜もふけていく。帰りはもちろん舟だ。ゆっくり、ゆっくり舟は進む。

私は本当に本当に運が良い。なんと山と山の間からひょっこりと満月が顔を出したのである。昔話の若者は、同じようにこの川の上であの満月を見たかも知れない・・・。昔話に入り込んでしまったような不思議な体験で感動した。

■九重（くじゅう）

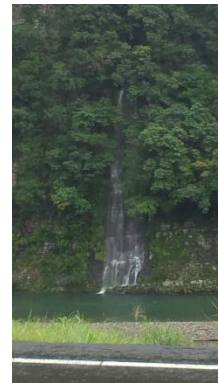
百夜月から川を下ること約 1 km、和歌山県新宮市熊野川町九重の集落が見えてくる。

九重で印象深いのは北山川を挟んで対岸（三重県側）に位置する絶壁だ。南北にキレイな地層が見え、専門家には【熊野層群】や【前弧海盆堆積体】と呼ばれているが、いま一つピンとこない。

ここには雨の日だけ『城（じょう）の滝』という幻の滝が現れる。昔、葛（カズラ）を取りにこの絶壁を登った人がいて「この滝の上には石灯籠があり、氏神様を祀っているんや」と話していたらしい。もちろん今は誰も登る人はいないが、昔はこの絶壁を『九重大倉』と呼んで信仰の対象にしていたようだ。



九重の集落と北山川



城の滝

この九重地区、昔から有名なのがお茶だ。土質や朝霧・夕霧などの気象条件が良かったのだろう。昔はお茶工場もあり、明治40年頃には年四百貫（1500kg）つくり、美味しいと評判で静岡の茶所へ出荷していたという。また静岡茶ブランドとしてアメリカへも輸出されていたらしい。また機会があれば

ば是非『九重茶』を飲んで頂きたい。

またこの茶を使ったお粥も美味しい。グルメマンガの『美味しんぼ』で九重茶粥が紹介されているほどだ。

この本では「和歌山を知ると日本の真の姿を知る事が出来る」と主人公・山岡士郎が言っている。山岡は停滞する日本経済と、疲弊した日本人が元気を取り戻すための鍵を“和歌山の食文化”に見出した。美味しい茶粥。茶の心地よい苦味と米の味が調和し、白粥とは一味違う風味豊かな粥だ。だが実は、茶粥は貧しさゆえの産物。江戸時代、狭い耕地面積に加え過酷な年貢の徴収により和歌山の農民の生活は困窮を極め、炊いた米をおなか一杯食べることはできず、少量の米で満足感を得られる茶粥を食べていたのだ。

しかしながら、と山岡たちは語る。そんな苦しい状況下でも茶粥を考え出し、さらに工夫を凝らして、やがてはそれを“楽しみ”や文化にまで高めた和歌山の人々の気概。厳しい生活の中で醤油や味噌、かつお節を生み出し、卓越した漁業技術とともに各地に広め日本の食文化の担い手ともなった“進取の気質”。辛苦にあっても楽しみを忘れず力強く前進してきた和歌山の人々、食文化を、日本人が見直し做うことが、日本の活性化につながるのではないか。

なんともデカイテーマになっているので、気になる方は『美味しんぼ 日本全県味巡り和歌山編（103巻）』をご購入下さい。

九重というのは169号線（311号線）沿いだけではない。意外と知られていないが、山の上の方にも集落があるのだ。今では車を数分走らせれば行く事は

可能だが、昔は舗装された道などなく、歩いて登っていったという。その集落と集落をつなぐ古道も残っている。

北山川で遊び、川原で石に触れ、古道を歩いて山の上へ。山の上から見る景色も最高だが、九重の家々を見ていると石垣がとても美しい。

野面積み（のづらづみ）・打ち込み接ぎ（うちこみはぎ）・切込み接ぎ（きりこみはぎ）

何の事が分からない方もいると思うが、これは石垣の積み方である。

《石の加工程度による分類》

石垣は、加工程度によって、野面積み・打ち込み接ぎ・切り込み接ぎの3つに分けられる。「接ぎ（はぎ）」とは、つなぎ合わせるという意味である。野面積みが最も古い年代に現れた積み方で、次に打ち込み接ぎ、切込み接ぎの順であるが、切込み接ぎの石垣が現れた以降も野面積みの石垣が見られることもある。

・野面積み（のづらづみ）

自然石をそのまま積み上げる方法である。加工せずに積み上げただけなので石の形に統一性がなく、石同士がかみ合っていない。そのため隙間や出っ張りができ、敵に登られやすいという欠点があったが排水性に優れており頑丈である。技術的に初期の石積法で、鎌倉時代末期に現れ、本格的に用いられたのは16世紀の戦国時代のことである。

・打ち込み接ぎ（うちこみはぎ）

表面に出る石の角や面をたたき、平たくし石同士の接合面に隙間を減らして

積み上げる方法である。関ヶ原の戦い以後、この手法が盛んに用いられた。野面積みより高く、急な勾配が可能になる。

・切込み接ぎ（きりこみはぎ）

方形に整形した石材を密着させ、積み上げる方法である。慶長 5 年（1600 年）以降、隅石の加工から徐々に平石にまでわたるようになり、江戸時代初期（元和期）以降に多用されるようになった。石材同士が密着しているので排水できないため排水口が設けられる。

まったく関心がないという方もおられると思うが、景色以外にも、このような楽しみ方があるので、ぜひ観察していただけたらと思う。

古道を歩くと 2 つ神社がある。

1 つ目はお寺の裏にある秋葉神社である。詳しい事はわからないが火の神様という事だ。私が気になったのは、この秋葉神社の木である。初めて見た時はビックリした。「え！バナナの木？」と思ったのだ。もちろん御神木かどうかかわからないが、あとから聞いたら芭蕉（バショウ）だという事だ。

そしてもう 1 つの神社が巖島神社である。江戸時代の文書には『弁財天社』と記されているらしいが、この神社は建てられた時期等いろいろな説があり、詳しく書く事はやめにする。しかし色々な資料や話を聞いて、一説だけは書いておこうと思う。



秋葉神社



厳島神社

ここに祀られている神様は水の神様。厳島神社の社殿の地下から湧き水が出ている（今現在も出ている）。神社周辺の人々は、昔からこの水を聖なる水として大切に生活に使っていたのだ。この地から湧き出す聖なる水が、北山川を通り、海に注がれる。だからこの地に厳島神社はあるのだという。

私達が生きていくうえで欠かす事の出来ない水が、この地から出ているという神様への感謝の気持ちなのかも知れない。

御神木はタブノキかな？いやイチイガシかな？とにかく境内には巨木が沢山ある。胸高周囲約5mのものもあり、23本が新宮市指定文化財天然記念物になっている。

疲れた心を巨木に癒してもらうのもいいかもしれない。

※美味しんぼの記事は、和歌山県の広報課ホームページ>和(nagomi)>vol.10

>美味しんぼ in 和歌山 食の原点は和歌山にあり。 から引用したものです

◎来月は九重&花井から宮井方面に下ります。